

第十四回 「世界青年の船」航海から

小川 了

二〇〇一年十月二十五日から十二月十三日までの五十日間、第十四回世界青年の船団長として、世界十五カ国の青年たち約二七〇人とともに太平洋地域の数カ国を巡航する旅をしました。なかなか得難い経験であり、読者の皆さんの参考になることもあるかと思いますが、簡単に紹介がてら、船内生活の幾つかについてご報告しようと思います。

はじめに「世界青年の船」とは何かをご紹介しておきましょう。世界青年の船は、「東南アジア青年の船」と並んで日本政府（直接には内閣府）がおこなう大事業の一つで、日本と世界各国、または東南アジア各国の青年が船内で生活をとにもする中で、地球的規模の課題や各国に共通した課題についての研究・討論をはじめとする各種の交流活動を通じて、また訪問国にお

ける種々の活動を通じて、参加青年相互の友好と理解を深めるとともに、国際化が進展する各分野において指導性を発揮できる青年の育成を目的として毎年おこなわれているもので、世界船は昨年で第十四回、東アジア船はすでに二十八回を数えています。第十四回世界船は当初、シンガポールからアラビア地域、そして東アフリカ、南アへ向かい、帰路はモーリシャスに寄って太平洋を突っ切るという航路で計画され、準備もされていたのですが、アメリカでのテロ事件後、太平洋に艦船が集結する事態になり、急遽、計画変更、晴海を出た後、サイパン、フィジー、ニュージールランド、シンガポール、バンコクを巡ることになりました。世界船は原則として一年おきに南西アジアからアフリカ地域へ向かう航路と、北米、中南米からオセアニア方面に向かう航路のものが予定されており、航路により参加諸国もアフリカやアラブ諸国、ヨーロッパが主体である場合と、南北アメリカ、オセアニア諸国

が多い場合に分れます。

昨年は本来なら南西アジア・アフリカ航路の年で、日本（約一二〇人）の他、アメリカ、オーストラリア、ブラジル、インド、スリランカ、エジプト、バールイン、アラブ首長国連邦、ケニア、南アフリカ、モーリシャス、ギリシャ、フィンランド、イギリスが参加、外国からは各国ともおよそ十人ずつという構成でした。日本人参加者（参加者のことをParticipant Youthといい、略してPY）は各都道府県から数人ずつ選抜されるようになっており、約五割が学生だったようですが、他は色々な職種の人々です。就職している場合、五十日という長期間を休むのは簡単ではないでしょうから、職場の理解は不可欠でしょう。外国では、参加希望者は大変多いようで各国とも競争率はかなり高いとのことでした。フィンランドやアフリカからの参加者のほとんどはユース・ワーカー、つまり何らかの青年活動に関わっていたようです。

さて、船は「につぼん丸」という豪華客船を借り切る形になるわけです。二万トン超の大きな客船で、両舷側には縦揺れを最小限にするためのコンピュータ制御された翼（幅二メートル、長さ四メートルで、スタライザーというそうです）がついており、あまり揺れないのですが、それでも全く揺れないというわけにはいきませんから、出航後、数日間はどうも気分がすぐれないという人が多くなります。そういった身体の不調を忘れさせると同時に、船内で新しく生活をとにする世界の若者たちの親睦を促進する目的もあるのでしょう。さまざまな親睦活動が組織されます。ナショナル・プレゼンテーションがこの時期の最大の行事でしょう。毎日、午前中は班ごとに討論会や各種文化活動がおこなわれるのですが、午後から夕食を挟んで夜にかけて参加各国がそれぞれ実に趣向を凝らしたプレゼンテーションをするのです。美しい民族衣裳を身に着け、踊り、歌い、そして各国ごとにその特徴を

際立たせるような演出がなされます。日本の場合には、参加者が全国に及ぶわけですから、各地方ごとの踊りや歌、民芸などが披露されます。何しろ若い人達ばかり（原則的に十八歳から三十歳まで）ですから、各国ごとのプレゼンテーションの後には皆がステージに上がり、ダンスになるわけです。世界中の民族衣裳が入り乱れ、その衣裳を互いに交換し合い、さまざまなダンスがなされました。

サイパン、スヴァ（フィジーの首都）を経てオークランドまでが旅の前半部だったといつてよいでしょう。各々の寄港地ごとに、それまでの世界船参加者たちが待ち受けてくれており、寄港している間（三日程度）の色々な行事をリードしてくれます。単なる観光



に終わらず、各種の社会事業施設の訪問をします。寄港地を出港するとき、PYを接待してくれた既参加青年たちは自分たちが乗船したときのあれこれ进行い出すのでしよう、胸詰まらせて涙する青年もいました。

オークランドからシンガポールまでの十四日間、船はどこにも寄港せず、走り続けたのですが、この間は私たち指導官にとってなかなか厳しい講義期間でした。毎朝九時から正午まで指導官それぞれの専門領域に関する講義をするわけです。間に挟まっている日曜日は講義がなく、ホッとしたものです。指導官としては団長以下、七人が乗っていました。日本人だけではありません。カナダ、韓国、オーストラリア、ナイジェリアの人でした。各々、環境問題の専門家であったり、心理学や教育を専攻する人であったり、また当今の重要テーマであるグローバル化やボランティア活動の専門家であったりするわけです。外国参加者たちはいずれも議論には活発に参加しますから、

それに釣られて日本人参加者もよく発言するようになり、それだけ指導官としてはきちんとした準備をしておかなければなりません。言い忘れましたが、船内での使用言語は英語です。

しかし、他方からすると、指導官と青年たちとの間には年齢の差、また指導官と参加青年という意識の差から、それまでは何となく完全にはうちとけない感じがあったのですが、その名状しがたい疎隔感が講義の場での互いの議論を通して急速に解消していくのが感じられました。やはり、教師にとっては教室こそが生徒との間で人間としての交流を築くベースになるのだということを実感したものです。教室での真剣な渡り合いが基礎にあつてこそ、その他の場所での交流も親身になれるのであつて、逆ではないということがよく分かった次第です。大きな船とはいえ、何しろ海に取られ、限られた空間で食事風呂も同じにし、デッキを歩いても常に顔を合わせるわけですから、疎

隔感を抱いたままではうまくいかないのです。

食事に触れたついでに記しておきましょう。毎日の三食は船内の大レストランでとるわけですが、和食、いわゆる洋食、中華風のものもあり、セルフ・サービスです。食事内容は毎日変わり、デザートも数種類あり、特にまず毎日出るアイスクリームにはいずれの国の青年たちも夢中になっていたようです。白いご飯を食べるとはいえ、それにケチャップをかけたり、ヨーグルトと砂糖をかけて食べる人がいたり、ピーナツと一緒に食べる人がいたりするのを見るだけでも異文化体験になったといえるでしょう。また、航海期間中、イスラム教徒にとつてのラマダン（日中は断食する）があり、この期間は船内でも断食する人がいたのも日本人にとっては勉強になったはずです。もちろんですが、料理にはどんな肉が使われているか必ず表示されています。インドからの参加者の中には厳格な菜食主義者もいて、肉に手を出さないのはもちろん、デザー

トにも卵が入っていないか確かめる人もいました。イスラム教徒への思いやりでしょう、豚肉料理、ハムやベーコンも一般のサービスタ台から少し離れた場所においてありました。こういった異文化体験は日々の接触を通してはじめて日本人参加者に実感されたのではないでしょうか。一度だけですが、鯨肉がでたことがあります。さすがに、外国人参加者は誰も手を出さなかったようです。ダチョウ、ウサギ、鹿なども供されました。

また、これはいささか不思議なのですが、卵や肉、魚にせよ、トマト、キュウリ、アスパラガスや大根、春菊などの野菜にせよ、毎日驚くほど新鮮なものが出るのです。毎朝のパンは船内で焼いているのです。船が寄港すると、その地の賓客など多くの人々を招いてレセプション・パーティが開かれ、いつもとは違ったごちそうが出ます。船で料理に携わる方々は、ほとんど休みがない（と思われる）状態で、毎日三

食、そしてラマダン中はイスラム教徒のための夜食まで、全く大変なご苦労があったと思います。また、若い参加青年たちは、船内では彼等の同年齢の若者たち（かなり多くがフィリピン人）が、船員としてさまざまな業務に携わっていることも眼にし、当然考えるところがあったはずです。

ところで、はじめにも述べたことですが、第十四回の世界船は当初の予定がアメリカでのテロ事件を受けて航路変更を受けました。しかし、当初予定されていた参加諸国には変更があったわけではありません。すでに記したとおり、アメリカ、イギリスと並んでアラブ諸国からの青年たちが乗り組んでいました。晴海出港は十月二十五日、アメリカはテロへの報復行動に出、アフガニスタン空爆を開始し、市民への被害が広がっていた頃でした。それに対してパキスタンをはじめとするイスラム諸国では反米デモが激しさを増して

いたのです。私としては、この時期に世界青年の船団長という任に当たったことに、ある重苦しさを感じないわけには行きませんでした。

た。アメリカ、イギリスなど西欧の国の参加者とアラブ諸国からの参加者との間で熱い議論が起こり、それがいいのか、考えざるを得ませんでした。どっちつかずの答えをすることには意味がないだろうし、はっきりとした立場を表明した結果、つるし上げになるかもしれないとさえ考えました。「団長、どう思うか」といわれて、「はい、ダンチョウの思いです」としゃれのめしてすむ場合ではない。

結果的にはこの重苦しさは杞憂だったのです。確かに議論の場では、相当に白熱した場面があり、また、



双方とも簡単には相手の論理を受け入れはしなかったのですが、船内でとるべき行動は互いに弁えていました。互いの文化、論理を尊重するということが、日々の生活をともしるということが、そう簡単に両立するものではないと認識した上で、しかし船内には規律が必要であることをよく理解していたのだと思います。また、先にも述べましたように、ナショナル・プレゼンテーションとそれに続くパーティーでの親睦は実際的な効果を発揮したのです。

というわけで、シンガポールにて外国青年たちすべてが下船する日は、参加青年たちにとって実に悲しい、寂しい一日だったようです。それぞれの国へ向かう飛行機の時間に合わせて次々に国ごとに青年たちが下船していくのですが、下船に合わせて、各国がナショナル・プレゼンテーションの時に使った歌、音楽が船内に流れ、劇的要素が強まりました。私にとってもまったく沈鬱な思いの一日でありました。

下船して三ヶ月後、インドやバレーライン、アラブ首長国などで世界船の「同窓会」のような会合がもたらたと聞いています。かなりの数の青年たちが集まったとのこと。仲間という意識は確実に醸成されたのでしよう。また、聞くところによると、タイやアラブ首長国など、幾つかの国で日本の「青年の船」を模した国際的な青年たちの船旅組織が生まれているとのこと。世界青年の船に乗ったからといって、すぐに友好の輪が広がるといったものではないと思いますが、しかし、友好というものはじっくり時間をかけて作り上げていくものですから、この青年の船事業は長い目で見た国際間の親善に寄与していることは間違いないでしょう。

(東京外国語大学)